

間身体性における原交通の考察

Zur Betrachtung der Urkommunikation in der Interleiblichkeit

キーワード：身体学、現象学、対化、共時間化

Schlüsselwörter: Somatologie, Phänomenologie, Paarung, Kozeitigung

武藤 伸司

MUTO Shinji

Abstrakt

In diesem Papier betrachten wir das Problem der Interleiblichkeit. Interleiblichkeit besteht aus unbewusster Leistung, die “Inter” durch “Urkommunikation” des Leibes erzeugt. Mit anderen Worten ist dies die Kozeitigung durch Parrung des sensorisch-motorische System (Kinästhesie) des Selbst und anderen.

Deshalb bestätigen wir zuerst den Begriff der Interleiblichkeit in Merlot-Ponty. Dann betrachten wir die Sachlage der Urkommunikation anhand der Diskussion über die passive Synthese in Husserl. Aus dem Verständnis dieser Urkommunikation weisen wir auf die dynamische Natur der Interleiblichkeit hin und beschreiben das Phänomen leiblicher Resonanz.

はじめに¹

身体学研究の構築にあたり、原理論と方法論がそれぞれ研究されてきた²。しかしながら原理論の研究において、間身体性における原交通の問題に対する考察が課題のまま残っている。

これまでの拙論において筆者は間身体性の概念についてすでに何度か言及しているが、それは、受動的綜合における対化によって生じる「身体の共鳴」である、という指摘に留まっていた³。この身体の共鳴という事態は、差し当たって言うのであれば、自己と他者という関係を形成する際の根源である。つまりこのことは、そもそも現象学をはじめとする諸々の質的研究が成立する原理的な根拠でもある⁴。

本論考はそのことを明らかにするため、改めて間身体性の議論を考察し、その中で「原交通

(Urkommunikation)』⁵という身体の「間」を発生させる無意識の構成能作、つまり自己と他者の感覚-運動系(キネステーズ)の対化による共時間化を指摘する。そしてこの共時間化が身体の共鳴であるということ考察する。したがって、他者が他者であるにもかかわらずコミュニケーションを交わすことができ、互いに理解できる可能性が生じているという、極めて当たり前の事態は、この間身体性の問題を考察することによって呈示できるだろう。

以上のことから本論考は、1. メルロ=ポンティにおける間身体性という概念を改めて確認し、2. フッサールにおける受動的綜合の議論を用いて原交通という事況(Sachlage)の成立を考察する。そしてこの原交通の理解から間身体性の力動的な性質を指摘し、身体の共鳴という事象について最後に言及する。これらの考察により、身体学研究における原理論は一通り

仕上がったものとして看做することができるだろう。

1. 間身体性とは何か

「間身体性 (intercorporalité)」⁶ という語は、メルロ＝ポンティの論考「哲学者とその影」において言及されている。メルロ＝ポンティの真骨頂であり、彼の思索の集約点とも言える身体現象学は、周知の通り『知覚の現象学』⁷ において詳細に研究されているが、身体性にこの「間 (inter)」という接頭辞が付されるようになったのは、この著作においてである。では、この間身体性という概念はいかなる意味を持つのか。

1) メルロ＝ポンティの身体論

間身体性の概念を考察する前に、メルロ＝ポンティの用いる身体ないし身体性という概念を先に考察しよう。

まずメルロ＝ポンティは『知覚の現象学』における身体の考察において、「[「感覚的性質」、知覚されたものの空間的規定、それに一つの知覚の現存と不在ですら、有機体の外部の事実上の状況の結果ではなくて、有機体が刺激を迎えてこれに関係する仕方を表している]」⁸ と述べている。一般に、身体という現象を対象化した際、それは極めて生理学的な、物的なものとして理解される。しかし上の言及のようにメルロ＝ポンティは、身体というある特定の有機体と外部環境の「関係」によって感覚ないし知覚が生じると考えている。

例えばメルロ＝ポンティは、「刺激の受容における有機体の機能は、ある興奮の形態をいわば「理解する」(concevoir「はらむ」) ことである」⁹ と述べている。このことはつまり、身体が生理学的な刺激-反応図式のように、単に物的な作用の過程(因果性)によっては理解できないということを指摘している。身体は当然ながら物質であり、外部環境の影響を受容してその反応を見せるが、単にそれだけではなく、ともに感覚や思考などの精神的な過程も生じている。このことからメルロ＝ポンティは、「[「精神-物理的な出来事」は、したがってもはや「世界内部の」因果性の型のものではない…(中略)…私はこれを、運動の伝達とか

ある変数による決定というような、第三人称的な一連の過程として、思い浮かべることはできない」¹⁰ と述べているのである。

このことは、例えば身体というものを何某かと言及するとき、それが客体としてのみ純粋に現れるということとはあり得ないということを示している。例えば、能動的に何かを掴もうとするその身体の動きにしても、受動的に感じられている服の重さや衣擦れの触覚的な感覚にしても、「私の」主観的な感性を免れて言及するとすれば、その現象の「意味」が失われてしまう。当然だが、意味が失われた状態では理解も言及も成立しようがない。つまり、現象や事象は私が認識しているから、または常に顕現的ないし現実的に身体感覚が伴っているから、それを理解するのであって、そこから離れた科学的な因果性の言及だけでは、その言及が何を指示しているのか理解することはできないのである。

このような身体的な感覚から現象の意味を掴むという通路とは逆に、現象の様態から身体的な感覚を生じるという通路もある。例えばフッソールは、「ある意識が機関車の貯水タンクに水が貯まったときに飽満を感じ、ボイラーに火が点けられるたびに熱を感じたとしても、だからといってその機関車がこの意識の身体というわけではない。[だがそう感じられている]」¹¹ (HuaV, S. 117) と述べている。つまり、自分の身体に直接的に感じられていない、相対的に外側の事象であっても、その現象の変化に自らの身体の感じられ方を映し(移し)込んで現象をとらえることができるという体験も認められ得るということである¹²。そうでなければ、身体で感覚されていない現象にそうした言及はそもそもできないし、またその現象の様態の意味を見出すことも解釈することもできなくなってしまう。例えばカントの言うような「物自体」¹³ という、この私の感覚から切り離された純粋な外部を想定して語ることは、過ぎた理想化であり、単なる抽象でしかないだろう。

またこの映し(移し)込みという事態は、何も私の身体以外の事物だけでなく、私の身体自体にも起こり得る。メルロ＝ポンティは、「たとえば私の右手が私の左手に触れるとき、私は左手を「物理的な物」として感ずるが、しかし同時に、私はその気になれば、ま

さしく、私の左手もまた私の右手を感じはじめ、es wird Leib, es empfindet [それが身体になり、それが感じる]という異様な出来事が起こる¹⁴と述べている。つまり、この私の身体でさえ、触るものと触られるものという一方的な関係ではなく、相互に逆転が起こることである。このような「触れる-触れられる」関係の相互変換を持つ触覚ないし諸感覚に満ちて拡がっている身体を、フッサールは「感ずる物」(HuaV, S. 119)とも呼んでいる。

以上のことから、身体は精神的でもあり、物理的なものでもあるが、それを感覚と切り離して理解することはできないということが確認される。特に自らの身体や他人の身体に対して、メルロ=ポンティは以下のように言及する。「私の右手は、私の左手に能動的触覚が到来するのに立ち会っていた。私が他人の手を握るとき、あるいはそれをただ見つめるというときでさえ、他人の身体が私の前で生気を帯びてくるが、それも事情に変わりはないのである。私の身体が「感ずる物」であり、それが触発される——私の身体が、であって、単に私の「意識」だけのことではない——ということを学び知ることによって、私は、他の【生命体】(animalia)や、おそらく他の人間もいるということを理解する準備を整えたことになる¹⁵。ここで重要なことは、上で述べられた「触れる-触れられる」関係の逆転という事態が自分の身体だけでなく、他者の身体に対しても起こることと、そしてそれが意識においてだけでなく、身体自体において生じているという点である。この点を以下でさらに考察していこう。

2) キネステーズとキアスム

これらのことについて注意すべきことは、単に思考としての比較や類比、投影、投入によってこれらが成立するのではなく、感覚的な次元においてそれが成立しているということである。メルロ=ポンティは「哲学者とその影」の論考において、身体がフッサールの『イデーニII』において言及された、「先所与性(Vorgegebenheiten)」(HuaIV, S. 5)における「作動しつつある、あるいは含蓄的な志向性¹⁶」の構成であることを指摘する。ここで言われる先所与性とは、簡単に言えば自分の身体に感じられたままの生の感

覚である。そして作動しつつある含蓄的な志向性とは、その感覚を把握し、時間的に掴まえておく過去保持(Retention)と未来予持(Protention)という性質である。つまり身体とは、統握図式のような、感覚に意味付与をし、知覚や表象という超越的な実在措置をするという仕方ではなく、すなわち自分の身体が物として存在すると素朴に認識する仕方でもなく¹⁷、「時間そのものを発動させる志向性¹⁸」によって構成されるとメルロ=ポンティは考えるのである。

このことは、フッサールの言うキネステーズ、そして受動的綜合の次元における構成に他ならない¹⁹。特にメルロ=ポンティの言う作動しつつある志向性とは、「私はできる(Ich kann)」という身体における運動の感覚そのものである。どんな身体運動も、これまでに経験ないし体験された動きのコツとそのカンの投射がサイクルをなすことによって一連の流れがメロディーのように形成される。つまり、その身体の運動性によって、先所与された様々な与件の諸性質(例えば身体の動き自体はもちろん、身体が接地する床や道具の様々なテクスチャ)が明るみになるのである。まさに身体が動くということによって、感覚が変化することによって、身体が身体としての諸感覚を形成していくのである。言わば、「運動性によって身体性が成立する」という現象なのである。

このことから、メルロ=ポンティの指摘する感覚的な感性、すなわち「触れる-触れられる」関係の変転は、まさに感覚の動的な変化であり、それこそがまさにフッサールの述べるキネステーズによって身体や外的な事象が成立するという軌を一にして理解される。上で言及した思想的な理解としてそうしたことが成立しているのではないと言えるのは、むしろそうした基礎的な身体性があってこそ、それらの高次の意識作用が成立するからなのである。

こうした触覚性ないし感覚の次元から考えれば、「もし私が他人の手を握りながら、彼のそこにいることについての明証をもつとすれば、それは、他人の手が私の左手と入れかわるからであり、私の身体が、逆説的にも私の身体にその座があるような「一種の反省」のなかで、他人の身体を併合してしまうからなのである²⁰」というメルロ=ポンティの言及も理解できる。

つまり、自分の身体が感ずる物であり、その感覚の「感ずる-される」関係の変換ないし循環という体験(キアスム)があるということによって、接触するその他者の身体ないし物体へと受動的な感覚の移し入れは可能となるということである。言い換えれば、私と他者の身体の互換が可能になるということでもある。このことからメルロ=ポンティは、「私の二本の手が「共に現前」し「共存」しているのは、それがただ一つの身体の手だからである。他人もこの共現前の延長によって現れてくるのであり、彼と私とは、言わば同じ一つの間身体性の器官なのだ」²¹と主張するのである。

以上のことから、メルロ=ポンティの身体性の概念を理解するには、感ずる物としての身体の特性を理解しなくてはならないということが言える。こうした意味での身体性、すなわち「感覚」を重要視する(その明証性を起点とする)ことは、「この感覚的な経験こそが、認識作用の行うあらゆる構築作業の「権利上の基礎」をなす」²²からである。またそれだけでなく、この感覚の二重性、すなわち「感ずる-される」関係における変転現象というキアスムが、まさに間身体性を成立させる根本的な条件なのである。そして、互いに感覚を持つ者同士が、その感覚の特性、すなわち二重感覚というキアスムによって「つながり合うこと」を生じさせるのである。この感覚の特性による各身体の一一致こそが、「同じ一つの間身体性の器官」とメルロ=ポンティが主張する要点であり、理由でもあることが、これらの道具立てから理解され得るであろう。

2. 原交通と何か

しかしながら、こうした感覚の重要性が強調されればされるほど、一般に以下のような批判が生じる。それは、「感覚は極めて一人称的なものである。そうであれば、この私の持つ他者の認識や他者の経験というものは、心理学的な意味での観念連合や判断作用に過ぎない。それらはすべて私の体験の投影に過ぎないのではないか」というものである。すでに上述においてメルロ=ポンティは、心理学的な意味で捉えられるような意識作用によって他者経験が成立するわ

けではないと批判しているが、改めてこの問題を考察しつつ、「原交通」という根源的な現象からその反駁を試みることにする。

1) システム(系)としての身体図式

例えばメルロ=ポンティは、「幼児の対人関係」という講義録において、「幼児が他人の身体と自分自身の身体とを、いわゆる〈身体〉として、つまり心を持った物体として同一視するようになるのは、それらを全体的に考えて同じものと見るからであって、決して〈他人の視覚像〉と〈自分自身の内受容的身体像〉との対応関係を一点一点組み立てていくからではない」²³と述べている(「考えて同じものと見る」と述べられているが、幼児においては当然そのような思考が未だできないであろうし、しているわけではない。この点は事象に即して理解すべきであり、言及のそのままの意味ではない)。つまり、人間は人間をそうした精神-物理的な存在として最初から認識してはいないということである。例えば生まれて間もない乳幼児は、母親や養育者の顔真似をするのだが、視覚経験の少ない乳幼児がその視覚情報から自分の表情筋を意図的に動かしているとは考え難い。ここでメルロ=ポンティが指摘するのは、「幼児がまず真似るのも、人ではなく動作」²⁴であるという点である。これはいかなることなのか。

これについては例えば、「他人が絵をかいているのを見るばあい、私は絵をかくことを一つの行為として理解することはできますが、それというも絵をかいているの動作がそのまま私の運動性に訴えかけてくるからです」²⁵というように、メルロ=ポンティは他者の行為を理解ではなく運動性の共感として指摘する。それは、絵を描く際の指や腕の動きなど、一つ一つの身体の部分や動作のポイントに注目したり抽出したりするのではなく、動きの形態(ゲシュタルト)全体をそのままに映し込んで「生きてしまっている」という状態である。ある身体が表現する運動性は、その他の身体に運動性を惹起させてしまうのである。

ここで言及される運動性についてメルロ=ポンティは、それを「体位図式」ないし「身体図式」と呼び、「鉛直線とか水平線とか、また自分がいる環境のしかる

べき主要な座標軸などに対する〈私の身体位置〉の知覚」²⁶であると述べている。自らの運動性に対する感覚は、内的な体験(手足を動かすことや筋肉や骨、関節の力感)や外的な体験(何らかの物体にぶつかったり押されたり、動かされること)が絡み合っ一つの運動「系」として統一される。こうしてできあがるのが身体図式なのである。そして、身体が「図式とか系といったものであれば、それは私自身の身体の或る感覚領域の与件から別な感覚領域の与件に移すことも比較的容易なのですから、同じようにして他人という領域にも移すことができるはずでしょう」²⁷と、メルロ=ポンティは述べている。これは一体いかなることなのか。またどのような仕組みにおいてそれが移し入れ可能となるのか。ある身体感覚領域と他の身体感覚領域を移し入れたり接合したりするという事象において、その機構のモデルとして考えられるのが、複数の系のカップリングという力学的な理解である。

2) カップリングと対化

カップリングとは、システム(系)間相互の創発に関する力学系理論としての考え方の一つである²⁸。例えば、一方の系が他方の系の変数に時間とともに影響を与える場合、それらの系はカップリングしていると言い得る²⁹。容器に入った流体を加熱したとき、容器の上部と下部の温度差が一定の値(臨界)を超えると、流体は上下方向に渦巻き状の運動を見せる。この場合、影響している変数は温度ということになる。つまりここでは、上部の流体と下部の流体のカップリングが生じて渦という新たな現象を創発しているということになる。

こうしたカップリングという現象を考慮して、複数の身体の関係を考えてみよう。上で言及したように、身体は感ずる物であり、それはすなわち外部環境の系と感覚-運動の系が相互作用することによって成立しているものであった(つまりここにもカップリングが指摘できる)。また、そうした二つの系は、相互変換可能(キアスム)なものでもあった。また、動作の運動性が何らか一定の形態を持つ以上、それは動きのリズムや流れを持っている。そうであれば、同期するメトロノームのように、二つの系同士の引き込み現象とし

て運動性が共鳴していくこと、類似していくことはそれほど不思議なことではなく、物理的にも説明可能な範疇にあると言えるだろう³⁰。こうした理解からすれば、各系の境界は単純には区切れず、その接地面において相互に浸透し合っており、少なくとも作用し合っているという理解は可能である。メルロ=ポンティはこのことについて、「〈私の行動〉と〈他人の行動〉という二つの項をもちながら、しかも一つの全体として働くような〈一つの系〉」³¹を指摘している。これがまさに、カップリングの現象として指摘できるのである。

もちろん、力学的なモデルの援用はある種のメタファーであり、精神-物理的な身体が接合するという事象にそのまま合致するとは簡単には言えない。しかしながらこうした事象について、フッサールは「対化(Parrung)」という受動的総合における無意識の能作を指摘している³²。この対化という自己と他者の接触によってもたらされる両者の差異化による際立ちは、まさに対立する二項が逆にその対立によって二項の関係という全体性を弁証法的に成立させているのである。こうしたことから、二つの異なる主観的な身体感覚は、心理的な意味での意識の働きによる投影とは全く異なる次元で互いの感覚の共有を果たしていると言い得るのである。

3) 原交通における共時間化

以上のことについて山口一郎は、「フッサールのとる立場は、両項の成立するこの時点以前に、両項の意味の発生と成立をたどり、本能志向性を介する生命体と環境世界との原交通、つまり、間の領域を開示」³³するものであると指摘している。ここで言われる原交通は、まさにこれまで述べられてきたメルロ=ポンティの間身体性の議論と同じものであると言える。

例えば、「幼児と周囲世界との原交通、つまり、自他の身体の違いがつかない匿名の間身体性を媒介にした交流」³⁴と山口が述べるように、未だ自我が発達しておらず明確な自己意識のない幼児の身体は「匿名的」なものとして理解される。だが、かえってそのことによって、間身体的な交流が可能になると山口は主張している。この身体の匿名性とその交流については、メルロ=ポンティが「見えるものと見えないも

の』において、「私は私の緑のうちに彼の緑を認めるからである。ここには、〈【他我】〉(alter ego)の問題などは存在しない。なぜなら、見ているのは【私】でもなければ【彼】でもなく、ここに今ありながら至る所に永久に放射し、個体でありながら次元でもあり普遍でもあるという肉の第一義的な特性によって、無名の可視性、視覚一般がわれわれに住みつからである」³⁵と述べている。つまり我々は、我も彼もない、つながり合った肉、すなわち間身体性として存在しているということなのである。

このことについてさらに山口は、この原交通を「自己の心身関係と他者の心身関係が、同時に、相互覚起することをとおして、意識にもたられる以前に、匿名の間身体性が生じ、それにより、自他の等根源性が獲得」³⁶されるのだと説明している。ここで述べられている相互覚起とは、自己と他者の類似性による相互の、無意識的な呼び覚まし働きである。それは、上のメルロ=ポンティの言及における肉の概念に照らし合わせれば、身体の癒合的かつ転換可能な特性としても理解される。つまり、間身体性という事象は、自他未分の等根源的な「場」でもある³⁷。

しかしながら、この等根源的な状態、間身体的な原交流の場はいかにして構成され、どのような意味を持つのか。例えば山口は、「自我の発展以前の乳幼児と、初めての授乳のさい覚醒化されてくる本能志向性に即応している母親とのあいだに、授乳衝動の志向と充実が経過していくという事例」³⁸を挙げている。母子の間において、「授乳」という行為が本能的な衝動において出現してくるとき、「その衝動が志向され充実されることで、そのつど、衝動充実という時間内容が成立」³⁹するのである⁴⁰。ここで成立する時間内容について山口はそれを、「両モナドの志向の充実として相互内属的(ineinander)にともに原創設(urstiften)されて、一つの共創される「生き生きした現在の立ち留まり」であることです。【モナド間に共現在化としての共時間化が生起しているのです】」⁴¹と述べている。モナドとは、部分を持たない存在の総体を指し示すライブニッツの術語であり、極めて単純化した表現をすれば、一個の存在単位ということである。フッサールはこのモナドという存在の単位に志

向性という相互作用の原理を見出し、各モナドに「窓がある」とした⁴²。このことが、山口の主張する「両モナドの志向の充実として相互内属」の意味である。そのモナド間の相互内属とはつまり、母子の両身体の接触において、互いの感性的な志向、すなわち二人の衝動志向性とそれに伴うキネステーゼが充実して一致することなのである。この根源的な身体感覚(キネステーゼ)の一致が、我々の意識生のもっとも根源的な、原初的な土台の設置がなされるということで、原創設と呼ばれる。さらにそれが、キネステーゼの一致であれば当然感覚変化の一致でもあることから、その各身体の時間性も一致する。各身体のキネステーゼ、すなわちそれぞれの感覚-運動系の一致は、まさに対化現象における原交流の現場なのである。

したがって、これらの議論から、異なる個体(モナド)にもかかわらず、キネステーゼ的な志向の充実がともに満たされるとき、「同じ時間を生きる」という共時間化の構成が成立するということが確認される。このことが間身体性における「身体の共鳴」に他ならないと言えるだろう。

以上のことから、身体の構成原理であるキネステーゼという感覚の時間性が、無意識的な対化という能作によって自己の身体と他者の身体の共鳴を生み出し、間身体性を成立させる構成プロセスが明らかとなった。この間身体性という基盤が原初的に構成されているからこそ、山口が「受動的総合としての対化と、その際、成立している自他の身体の区別をとおして、相互主観性が確認できます…(中略)…直接的キネステーゼの有無によって、自他の差異(自己の自己性と他者の他者性)が意識されます」⁴³と述べる通り、その構成の後に成立する間主観性の構成へと理解をつなげることができるのである。他者を他者として明確に意識するこの私の確立された主観というもの、間身体性の共時間化と対化という両面的な性質にその出自を持つ。いかに主観が成熟した自我ないし精神であったとしても、現象学的還元によって能動的に現象学的な自我を作動させるのだとしても、主観的な意識を身体から切り離すこと、つまりその根を切り離して枝葉だけのそうした精神性に意味も活動性

も現実として持たせることはできないのである。

この点において、身体を離れた精神は虚構でしかないと言えよう。繰り返すが、間身体的な、間モノ的な志向充実の相互内属が成立している(原創設されている)からこそ、能動的な志向分析が可能になるのである。例えば、指導者と選手が間身体的な意味で、感覚や情動のレベルで相互の志向充実が成立していなければ、どんな借問も相手には響かないし、問いを發した側も答えの志向的な内実を受け止めることはできない。なぜなら、これまでの議論からして、間主観的で能動的なコミュニケーションを本来的に成立させるためには、間身体的な原交通のレベルで互いに信憑ないし信頼(これを特に原信憑(Urglaube)とも言い得る)できる関係を確立させることが不可欠であると言えるからである。

したがって、他者性が構成される原初的な「場」は、こうした各身体の感覚的な接触というキネステーゼの変化によって自他の分化が生じることの前提なのである。癒合の前提がなければ、分化という現象も生じようがない。フッサールや山口が指摘するように、身体間の動的な接触を契機にして発動する対化という意識の本質規則性は、各人の意識の「内(自己)」と「外(他者)」を区切る重要な能作であると理解されるのである。

おわりに

人間の原初的な意識の次元で成立する間身体性という現象は、人間のコミュニケーションの問題全般に届き得る射程を持つと言える。幼児の伝染泣き、人の痛みを痛むこと、スポーツ観戦で手に汗握ることなど、様々な事象にその根拠を与える可能性を持つ。ここでは未だ展望を述べるに留まるが、この原理の理解でもって、さらに具体的な事象の分析と解明にこの概念を使用する準備は整ったと言えるだろう。つまり、身体学の原理論のあらましがここに揃い出たのである。今後は、さらに原理論の詳細を詰めつつ、実践的な場での概念活用を志向していきたい。

*本論考は、東京女子体育大学平成30年度奨励個

人研究費を受けてなされた研究、その成果の一部である。

注

¹ 凡例:引用文に無い語句を補足する場合、〔〕内に示す。

² 原理論について、拙論「『身体学』の研究課題—身体学という学問体系の構築—」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要』所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学第51号、2016年、54頁参照。また、拙論「幼児身体学の概要と課題」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要』所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学第52号、2017年、45-53頁参照。そして方法論については、拙論「身体学研究の展開:研究における方法論の構築とその実践」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要』所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学第53号、2018年、63-72頁参照。

³ 拙論(2017)、50-51頁参照。

⁴ 拙論(2018)、67-68頁参照。

⁵ この原交通という語について、山口一郎『存在から生成へ』知泉書館、2005年、第二部第二章第四節「受動的発生と他者」において頻出する概念である。フッサールによる受動的総合の分析において、身体と環境、身体と身体が原ヒュレーのレベルで出会う現象を山口がそのように呼んでいる。本論考は、山口が指摘するその概念の考察でもある。

⁶ M.メルロー=ポンティ『シーニュ 2』竹内芳郎監訳、みすず書房、1970年、24頁参照。

⁷ Cf. Merleau-Ponty, Maurice., *Phénoménologie de la perception*. Gallimard, 1976. (邦訳: M.メルロー=ポンティ『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982年)

⁸ Merleau-Ponty (1976), p. 103 (邦訳: 139頁参照。)

⁹ Ibid. (前掲書同所参照)

¹⁰ Ibid. (前掲書同所参照)

¹¹ 原文は、「Denken wir uns ein Bewusstsein (mag dazu ein Seelen- reales gehören oder nicht),

etwa das meine, das in der Beziehung zu einer Lokomotive stände, so dass es, wenn diese mit Wasser gespeist würde, das angenehme Gefühl hätte, das wir Sättigung nennen; wenn sie geheizt würde, die Empfindung der Wärme usw. Offenbar würde um des Bestandes solcher Beziehungen willen die Lokomotive nicht “Leib” zu diesem Bewusstsein]である。最後のwürdeを反語として訳した。

¹² 拙論(2017)参照。

¹³ カント, イマヌエル『純粹理性批判』上、原佑訳、平凡社ライブラリー、2005年、57頁参照。ちなみに、B版序文S. XXVIIの個所である。

¹⁴ メルロー=ポンティ(1970)、14頁参照。

¹⁵ メルロー=ポンティ(1970)、17頁参照。【】内は傍点が付されている。

¹⁶ メルロー=ポンティ(1970)、12頁参照。

¹⁷ 統握図式とは、高次の思考作用を構成する能動的総合のプロセスである。身体における感覚の構成という低次の受動的総合は異なり、顕現的、能動的な意識の作用的な志向性の構成である。この構成によって、直接的な感覚の意識が、そこから離れた間接的な、すなわち私の身体の外側にある対象として認識されるようになる。こうした認識はむしろ我々の自然な意識の在り方であるが、現象学ではこれを現象学的還元という方法によって、外的に対象化されない(超越化されない)内的な体験へと引き戻すことを不断に遂行することによって、意識の働き自体を考察することを可能にする。

¹⁸ メルロー=ポンティ(1970)、12頁参照。

¹⁹ キネステーゼと時間的な志向性(時間意識)の関係については、拙論(2016)を参照のこと。

²⁰ メルロー=ポンティ(1970)、17-18頁参照。

²¹ メルロー=ポンティ(1970)、18頁参照。

²² メルロー=ポンティ(1970)、16頁参照。

²³ M. メルロー=ポンティ『眼と精神』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1966年、132頁参照。

²⁴ メルロー=ポンティ(1966)、134頁参照。

²⁵ 前掲書同所参照。

²⁶ メルロー=ポンティ(1966)、135頁参照。

²⁷ メルロー=ポンティ(1966)、135頁参照。

²⁸ この点について、拙論「現象学と自然科学の相補関係に関する一考察(3)」『「エコ・フィロソフィ」研究』第11号、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2017年、113-124頁を参照のこと。

²⁹ Cf. Bechtel, W., Abrahamsen, A., *Connectionism and the Mind*. (2nd ed.), Oxford: Basil Blackwell, 2002. p. 242.

³⁰ どんな運動にも、どんな物質にもリズム運動、すなわち振動が生じる以上、引き込み現象は生じ得るだろうと考えられる(蔵本由紀編『リズム現象の世界』東京大学出版会、2005年、第2章を参照のこと)。

³¹ メルロー=ポンティ(1966)、135-136頁参照。

³² 拙論(2017)、46頁参照。

³³ 山口一郎『現象学とははじめ』改訂版、日本評論社、2012年、216頁参照。

³⁴ 山口(2012)、244頁参照。

³⁵ M. メルロー=ポンティ『見えるものと見えないもの』みすず書房、1989年、198頁参照。なお、【】内には原文で傍点が振られている。ここで言及される肉とは、当然物理的なものではなく、かといって精神的な観念でもなく、またそれらの総和でもない。メルロー=ポンティによればそれは「〈存在〉の「エレメント」(メルロー=ポンティ(1989)194頁)であり、「【場所】と【今】に結びついている」(前掲書同所参照)ものである。

³⁶ 山口(2012)、268頁参照。原文では「当根源性」と表記されているが、これは誤植である。「等」が正しいため、引用に際して修正した。

³⁷ 「世界とは肉だとしてみれば、身体と世界の境界をどこに置くべきだろうか」(メルロー=ポンティ(1989)192頁参照)という言及からもそのことが窺えるだろう。

³⁸ 山口一郎「メルロー=ポンティの「肉」とフッサールの「受動的総合」」『メルロー=ポンティ研究』第20巻、日本メルロー=ポンティ・サークル、2016年、55頁参照。

³⁹ 前掲書同所参照。

⁴⁰ この衝動志向性における時間化について、筆者は未来予持的な傾向から分析している。拙著『力動性としての時間意識』知泉書館、2018年、第三章を参照のこと。

⁴¹ 山口(2016)、55-56頁参照。【】内には原文で傍点が振られている。

42 モナドの概念について、武藤(2017)を参照のこと。

43 山口(2012)、268頁参照。

参考文献

〈Husserliana〉

Bd. IV: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch. Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, hrsg. von M. Biemel, W., 1952. (邦訳:『イデーニ』全2冊(II-1, II-2)立松弘孝・別所良美訳(II-1)、立松弘孝・榊原哲也訳(II-2)みすず書房、2001年(第1巻)、2009年(第2巻))

Bd. V: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Drittes Buch. Die Phänomenologie und die Fundamente der Wissenschaften*, hrsg. von Biemel, W., 1952. (エトムント・フッサール『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想(イデーニ) 第3巻 現象学と諸問題の基礎』渡辺二郎・千田義光訳、みすず書房、2010年)

Bechtel, W., Abrahamsen, A., *Connectionism and the Mind*. (2nd ed.), Oxford: Basil Blackwell, 2002

カント, イマヌエル『純粹理性批判』上、原佑訳、平凡社ライブラリー、2005年

蔵本由紀編『リズム現象の世界』東京大学出版会、2005年

Merleau-Ponty, Maurice., *Phénoménologie de la perception*. Gallimard, 1976. (邦訳: M. メルロ=ポンティ『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982年)

メルロ=ポンティ, M.『眼と精神』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1966年

メルロ=ポンティ『見えるものと見えないもの』みすず書房、1989年

メルロー=ポンティ, M.『シーニュ 2』竹内芳郎監訳、みすず書房、1970年

武藤伸司「「身体学」の研究課題—身体学という学問体系の構築—」『東京女子体育大学・東京女子体

育短期大学 紀要』所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学第51号、2016年

——「幼児身体学の概要と課題」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要』所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学第52号、2017年

——「現象学と自然科学の相補関係に関する一考察(3)」『「エコ・フィロソフィ」研究』第11号、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、2017年

——「身体学研究の展開: 研究における方法論の構築とその実践」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要』所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学第53号、2018年

——『力動性としての時間意識』知泉書館、2018年

山口一郎『存在から生成へ』知泉書館、2005年

——『現象学ことはじめ』改訂版、日本評論社、2012年

——「メルロ=ポンティの「肉」とフッサールの「受動的綜合」」『メルロ=ポンティ研究』第20巻、日本メルロ=ポンティ・サークル、2016年